

生活協同組合によるコミュニティへのアプローチ ―「パーティ」の取組みから―

片上 敏喜
(奈良女子大学社会連携センター)



当研究所「おしゃべりパーティ研究交流会」

はじめに

日本における生活協同組合（以下、生協）の特徴の一つが班組織である。班を共同購入事業に導入することで生協は事業を成長させるとともに、組合員の組織づくりや活動を広げてきた。しかしながら近年、こうした日本型生協モデルともいわれる班組織の縮小が指摘されている。例えば、山内（2010）による「2009 年度全国組合員活動実態調査」の報告においても、共同購入を実施する班の組織率が低下していることが読み取れる。こうした背景には様々な要因が考えられるが、その一つとして女性のライフスタイルの変化が挙げられている。杉本（2011）が、女性のライフスタイルが変化することによって、「在宅する主婦」という、班を基礎としていた存在が脅かされるようになったというように、班を支えていた基盤の維持が難しくなったことが班組織へ影響を与えているといえる。そして、その影響は無店舗事業と組合員同士のコミュニティ形成に関与してきた。班組織の縮小は、班を基軸とする生協の無店舗事業に大きな影響を与えてきたといえるであろう。しかしながら、事業の側面からに関しては個別に商品を仕分けし、個々の組合員宅に直接配送する個配事業を進めていくことによって、ある程度の解決が図られてきたといえる。一方、班組織の縮小による組合員同士のコミュニティ形成に関する問題については、摸索が続いている状況にあるといえる。そうした中で現在、班に代わる取組みの可能性として注目されているのが、非組合員も対象として行われている「パーティ」である。

本稿では、「生協が組合員のみならず、非組合員も含めて行われるパーティ」の取組みについて、その意義をこれまでのパー

ティに関わる研究を考察していきながら検討していくことを目的としたい。

組合員同士のコミュニティへのアプローチ

コミュニティは、「構成員相互の交流があり、それらの間に共通の目標・関心事等の絆が存在し、一定の地理的範囲を伴う事を一般的要件とする存在」(松原 1978)や「一定の地理的範囲の中で、メンバー間で共通の関心が存在し、相互に交流が行われている集団」(パーソンズ、T1974)といわれるように、一定の範囲内における人と人との結びつきを表す。従来の班を単位とした組合員同士のコミュニティにおいては、こうした人と人との結びつきからなる生協職員と組合員の直接のコミュニケーション、組合員間の口コミ効果のマーケティング、組合員の学習などがすすめられてきた。その中で「班会」や「班長」から始まる学習・運動の組合員組織が確立し、組合員リーダーが育ってきたといえる(若林 2010)。しかしながら、上記でも述べたように班組織が縮小していくとともに、班による組合員同士からなるコミュニティの維持そのものが難しくなっている。こうした問題に対して杉本(2011)は、従来の班のように居住地域で組合員の末端組織をつくるのではなく、あくまで個人をベースとして、それぞれが希望するテーマで活動を行う仕組みとしていく方法を提示している。そして、こうした方法に対する生協側の関わり方として「組合員の自主性に全面的に任せて本部や役職員はそれに関与しない」方法や、生協が「資金的・人的なサポートを手厚くしていく」方法を示し、具体的なアプローチ例として、ララコープやコープしが

の「パーティー」を挙げ、その展開の可能性を述べている。

パーティーとは、地域によって名称は異なるが「ララパーティー」や「おしゃべりパーティー」等と呼ばれ、その内容はテーマ活動(商品・環境・平和など)や商品開発・販促企画(試食会・商品への意見収集)、班活動等とは異なり、あらかじめ決められた食品セットメニューを選択し、その食品を囲んで参加メンバー同士でおしゃべりをする活動である。こうしたパーティーは、①具体的なテーマを決めない、②販促を大きく打ち出さない、③非組合員の参加が可能、④参加者がおしゃべりの内容を報告書として提出し、生協側がその報告書を読み込む、といった点を特徴とする取組みとして捉えられる。

これらの特徴からみる注目点は、いずれの特徴も直接的には生協に帰結しないということにある。例えば、班組織を生協の「事業の側面」から見た時、これまで地域に組織された組合員の班を活用することで、コスト的に有利な条件が作られていた。具体的には、個別消費者毎の商品の仕分け・配送や商品の宣伝、消費者のニーズの集約といった業務を、班の組合員が無償に近い形で担われてきた(杉本 2011)。ゆえに、班組織の活力の多寡は、生協の事業面に直結する。しかしながら「パーティー」という取組みは、上記①～④の点からみても生協の事業面には「直接的には関与しない取組み」であるといえる。

協同の契機づくりとしてのパーティー

周知の通り、協同組合とは、「人々が自主的に結びついた自律の団体」と「共同で

所有し、民主的に管理する事業体」という「運動体」と「経営体」の二つの側面を持っている（北川 2008）。協同組合には「共通の理念」（運動目的）があり、その実現のために「事業」という経済的行為が行われている。協同組合における事業とは、共通の理念を実現することを目的として行われる「アプローチ」であり、その対象は組合員となる。協同組合は、例えば株式会社のように、出資と利用と運営の関係が個々に独立し、経済的な利潤の極大化を目的とするアプローチではなく、「人と人との結びつきやつながり」に基づいた組織を成立させる。具体的には、一人一票制の原則をもって、出資額の多寡にかかわらず同一票の権利をもっていることと、組合員が出資者、事業利用者、運営の参画者といった側面を同時に有するという、二つのアプローチを選択していることによって成り立たせているといえる（北川 2008）。

そこでは、組合員の思いや期待に意識を傾け、つなげていくことで「共通の理念」を紡ぎだし、「事業」によって実現されていくのであるが、このような協同組合における動きは、組合員同士を超えたコミュニティ形成へ寄与しにくいという前提があった。それは、一部で員外利用が認められているとはいえ、「組合員制」の原則のもと、あくまで組合員を対象に、組合員の共通の利益のために事業を運営しなくてはならないからである。

しかしながら、現実的に隣近所で作る班という集まりが成り立たせていくことが難しくなっている現在の状況において、個々の組合員同士「のみ」で、協同組合としての内実が維持していくことができるであろうか。1995 年、国際協同組合同盟は「協同組合原則」を改訂し、第 7 原則「コミュニティへの関与」を定めている。それは生

協は組合員だけではなく、対象地域のコミュニティに対しても責任を持つべきだという宣言である。つまり、組合員はもともと地域というコミュニティの一員であるため、生協が広くコミュニティへ関与すること－非組合員を対象とした「パーティ」などは、組合員の協同の契機づくりに寄与していくと考えられるのである。

パーティによる コミュニティ形成

くらしと協同の研究所主催で開催された「第 3 回おしゃべりパーティ研究交流会（2009 年 11 月 14 日開催）」、「第 4 回おしゃべりパーティ研究交流会（2012 年 3 月 10 日開催）」の両研究交流会では、各生協（参加生協：生活協同組合しまね、生活協同組合ララコープ、生活協同組合コープしが、京都生活協同組合、生活協同組合おおさかパルコープ）からの取組報告をもとに、大学研究者も交えて多角的にパーティについて議論し、今日的意味や生協が取り組む意義を深めている。

その中で浜岡政好（当時くらしと協同の研究所研究委員・佛教大学教授）は、以前は「班」が組合員活動の中心であったが、「班」の維持が困難となり組合員と組合員以外の地域の人々がつながりにくいようになってきた。そのため「生協の商品を食べること」＋「おしゃべりすること」を基盤に、多様なつながりをつくることが注目を浴びると述べている。またパーティを契機に友人関係となり、後にその関係性が続く傾向が出ていることの述べ、パーティが定期的に集まれる機会になっていることを指摘している。

加えて、①コミュニティへの貢献、ソー

シャルキャピタルの経験の蓄積、安全・安心の社会づくりへのつながり、②生協の事業や活動への影響としての職員・組合員・地域住民とのインターフェースの役割、③生協の事業面での供給・拡大へのひろがりへの貢献として、パーティに参加するだけでなく、パーティ後に提出される報告書を通じて、企画、振り返りの作業を行うことで、商品の問題を考え、組合員組織の拡大など地域における生協の存在感を高めていく契機となることについて述べている。また中川順子（当時くらしと協同の研究所研究委員・立命館大学教授）は、つながりが希薄化している現代社会の状況を鑑み、「社会的に排除されない感覚」として、「とにかくしゃべれた、しゃべれた人の間に自分がいた」という自分がそこにおいて、みんなが自分の話を聞いてくれる、みんなの話も聞けた、という相互性のような感覚の重要性を指摘している。そこでは「集まること自体」に楽しみを見出していることや、「生協」という言葉を出さずに個人の活動としてパーティを行うことができる条件－非組合員の参加を認めている点など－があることから、個人の背後にある関係性を切り離して、個人と個人が寄り合って楽しめる場を作ることができるということころに、パーティが地域のコミュニティ形成に寄与できるという点が指摘される。つまり、パーティが義務や責任（勧誘など）から若干の距離を取って離れることができる状態を通じて、個人として「つながり」に寄与する役割が担われていると考えられるのである。

パーティの内実と展開について

ここまで述べてきたように、パーティに

注目する意義については、先行研究や資料からも読み取れることがわかる。また本号の「おしゃべりパーティとは何か、実践例からの接近」からの報告でも述べられているように、パーティが行われている各生協に伺い、実際の活動状況やパーティを行う背景、またパーティを主催している生協側の関係者の「声」を直接聞く時、パーティという取組みそのものには、「各地域ならではのモチベーション」があり、かつ、その内実もバラエティに富んでいることがわかる。こうした生協のパーティが広くコミュニティに関与していくために重要なことは、上記でも述べた各地域ならではのモチベーションとバラエティさを多義的であるとみて、そこに「融通」や「柔軟性」を持たせながら、各生協ならではのパーティを行っていくことができる基盤を整備していくことにあると考えられる。今後は上記の点を加味しながら、現状において不足しているパーティにおける実態把握の追究を進め、より詳細なパーティ開催までのプロセスと、パーティ後の経過に焦点をあてたヒアリング調査を現場で行い、その内実と展開を明らかにしていきたい。

【参考資料・文献】

- 山内寛（2010）「組合員組織の今日的な到達点－2009年度全国組合員活動実態調査より－」『生活協同組合研究』2010年1月号、Vol.408、生協総合研究所。
 杉本貴志（2011）「班からパーティーへ－組合員の「拠点」はどうあったか－」『協う』124号くらしと協同の研究所、pp.2－3。
 松原治郎（1978）『コミュニティの社会学』東京大学出版会。
 パーソنز、T 著・佐藤勉訳（1974）『社会体系論』青木書店。
 若林靖永（2010）「生協商品事業の再構築」『現代生協論の探求——新たなステップをめざして』コープ出版、p268。
 北川太一（2008）『新時代の地域協同組合』家の光協会、pp.18-23。
 くらしと協同の研究所（2009）『第3回おしゃべりパーティ研究交流会資料』くらしと協同の研究所所蔵資料。
 くらしと協同の研究所（2012）『第4回おしゃべりパーティ研究交流会資料』くらしと協同の研究所所蔵資料。